

世界遺産 玉置神社の緩衝地帯

「神木の着生木伐採

世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の大率奥詣道のルート上にある神社の神木に寄生した着生木の伐採をめぐる、地元が対立している。「樹勢を回復したい」という神社とその求めを受けて伐採を認めた県教委に対し、氏子らは「信仰の対象を傷つけるとは」と反発している。



▲①着生木を伐採する前の神代杉。樹木の上部に中心に着生木の葉が茂っている＝2011年7月、原秀雄さん提供
②着生木を伐採した後の神代杉＝玉置神社



生木がすべて伐採された神代杉は直射日光や風が当たり、樹皮が乾燥しすぎて白化している。吸水能力の衰えた老木には致命的な事態」とと懸念され、原さんは「神社と県教委の決定には疑問が残る」と批判する。

議連も問題視

住民団体から連絡を受けた世界遺産国会議員連盟（代表＝馬淵澄夫衆院議員、約50人）も調査を始めた。県教委や神社から話を聞いた連盟特別顧問の玉置公良・元衆院議員は「信仰の対象の杉であり、（緩衝地帯とはいえ）世界遺産の意義と保全に対する認識が欠落している」と県教委などの対応を問題視する。

「樹勢を回復」 地元対立 「信仰の対象」

十津川村の玉置神社境内にある杉の大木、神代杉。直径8・4メートル、高さ28メートル、樹齢3千年と伝わる。

県指定天然記念物・杉の巨樹群の代表的な存在だ。大率奥詣道から少し離れた、世界遺産の周囲に設けられる緩衝地帯（バッファゾーン）に生えている。着生

県教委が許可

県教委文化財保存課によると、数年前に神社側から「神代杉の樹勢を回復したい」と相談があり、昨年3月に県教委が日本樹木医会県支部に診断を頼んだ。

「着生植物のリュウブが10本程度あり、樹勢はかなり衰えている。リュウブを取り除きたい」と報告書で診断されたため、県教委は現状変更を許可。伐採は県教委と村の補助事業だった。「神代杉の樹勢を回復したい」と相談があり、昨年3月に県教委が日本樹木医会県支部に診断を頼んだ。

「着生植物のリョウブが10本程度あり、樹勢はかなり衰えている。リュウブを取り除きたい」と報告書で診断されたため、県教委は現状変更を許可。伐採は県教委と村の補助事業だった。「神代杉の樹勢を回復したい」と相談があり、昨年3月に県教委が日本樹木医会県支部に診断を頼んだ。

「着生植物のリョウブが10本程度あり、樹勢はかなり衰えている。リュウブを取り除きたい」と報告書で診断されたため、県教委は現状変更を許可。伐採は県教委と村の補助事業だった。「神代杉の樹勢を回復したい」と相談があり、昨年3月に県教委が日本樹木医会県支部に診断を頼んだ。

「着生植物のリョウブが10本程度あり、樹勢はかなり衰えている。リュウブを取り除きたい」と報告書で診断されたため、県教委は現状変更を許可。伐採は県教委と村の補助事業だった。「神代杉の樹勢を回復したい」と相談があり、昨年3月に県教委が日本樹木医会県支部に診断を頼んだ。



玉置神社

は緩衝地帯にあり、伐採は世界遺産の普遍的な価値を損なうものではない」と話し、公開質問状に対しても今月中旬、県教委が同様の回答をした。（要山出）